

8 宗教思想と聖書

共同体の信仰 個人の信仰・思想

宗教言語（象徴・隠喩・モデル） 概念的言語

8 - 1 正典論と聖書学**- 神の言葉と人間の言葉 -**

(1) 聖書の言葉の二重性

1. 聖書とは？

宗教書である 神の言葉 正典論（信仰）

歴史的文献である 人間の言葉 近代聖書学（理性）

2. 近代聖書学とキリスト教神学との分離・分裂

正典の権威と理性の自律（学問の自由、懐疑と批判）

聖書学は不信仰か？

方法論的前提：資料批判、連続性・同質性、現在中心

3. イエス・ルネサンスと聖書学の新しい展開

合意事項の崩壊とその後（新しい合意形成の試み？）

原始キリスト教の多様性の自覚

4. 聖書を読む立場

読解の解釈学的構造：

テキスト世界と読者の生活世界との地平の融合

・現代人（とくに非キリスト教徒）が聖書を読むとは？

・聖書をどう読もうと私の勝手？

・聖書とはどんな書物であるかに即した読み方

5. 聖書の歴史性に注目する方法論

聖書と現代との歴史的距離の意識

近代人の日常性・歴史意識

1) 宗教書として成立し伝承され、そのように読まれることが意図されているという

歴史的事実を尊重する

「神の言葉」としてではなく、

「神の言葉として意図されているもの」として

聖書テキストの解釈からキリスト教思想へ

2) 一般的なテキスト解釈学の方法論を採用する（方法論の学際化）

文献学的、歴史的、構造主義的、文芸批評的

(2) 正典論と靈感説

6. 正典

本書のリスト（閉じた正典）、規範・基準（信仰と生活との）、靈感性

7. 靈感説の二つの立場：

：「聖書 = 啓示（神の言葉）」の実体的静的同一性

逐語靈感説 (inspiratio verborum)

:「聖書 神の言葉」の動的同一性（動的靈感説）

人間の言葉と神の言葉との間接的同一性

神の言葉の出来事性

8. キリストの二重性（両性論） 聖書の言語的な二重性（神言性・人言性）

analogia / symbol/ metaphor

聖書解釈の方法論

8 - 2 旧約聖書と新約聖書

9. 旧約聖書、新約聖書 「契約」

神と人間との間に制定される人格関係

10. 聖書の構成と構造

契約とその成就との間の歴史的プロセス、このプロセスを創造と終末という全体的実在のプロセスの内部に位置づける。

聖書の諸文書の間には、重複、矛盾、空白、中断が存在するが、聖書の全体としての構造は明確である。

律法、歴史、預言 / 福音書、歴史、書簡、黙示録

<ブックガイド>

1. 日本基督教団出版局編 『聖書学方法論』
2. 上田光正 『聖書論』（日本基督教団出版局）
3. イーグルトン 『文学とは何か』（岩波書店）
4. 渡辺善太 『聖書論 第一巻聖書正典論』（新教出版社）
5. 田川建三 『書物としての聖書』（勁草書房）
6. 宮本・山本・大貫 『聖書の言語を超えて』（東京大学出版会）
7. ボーグ 『イエス・ルネサンス』（教文館）
8. パネンベルク 『組織神学の根本問題』（日本基督教団出版局）